九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520758

出版情報：九州大学新聞. 575, 1968-04-25. 九州大学新聞部
バージョン：
権利関係：

（1） 第575号 （昭和23年7月8日第3種郵便物認可） （毎月25日発行） 九州大学新聞 1966年4月25日

北海道大 MAY 27. 19

九州大學新聞

発行所
福岡市箱崎町
九州大学新聞部
電話(64)1101
振替福岡13103
4頁20円・2頁10円
年400円・半年200円
発行人 鶴川 洋

▼五七五号の主な目次

一面 九大祭、学内ニュース
二面 論説、月村批判
三、四面 四十二年度卒論
六面 ネパール・ヒマラヤ紀行（中）
七面 新入生諸君へ

第二十一回九大祭

今年は後・夜・祭に

祭り気分の転換のため

今年も九大祭を行なうため「第二十一回九大祭実行委員会」の設置された事が去る三月二十九日に報道された。昨年の九大祭は、「教授学生主導や、文化の自立論」が、行われていた前夜祭を取り止めるなど、「現在の思想、行動の理論を問題にする」ことを目的として、「学問に基礎を置き、民主的文化、平和的学問研究活動を行なう」ことを目的として、「九大祭期間のキャンペーン的性格」を持ち、九大祭の目的に基づく活動が充実していないからその九大祭は日常的活動を継続的に行なうべきであるとの理論を展開している。

今年企画の変った点は昨年まで行なわれていた前夜祭を取り止め、後夜祭を中心とした祭りとなることである。これは、「現在の思想、行動の理論を問題にする」ことを目的として、「学問に基礎を置き、民主的文化、平和的学問研究活動を行なう」ことを目的として、「九大祭期間のキャンペーン的性格」を持ち、九大祭の目的に基づく活動が充実していないからその九大祭は日常的活動を継続的に行なうべきであるとの理論を展開している。

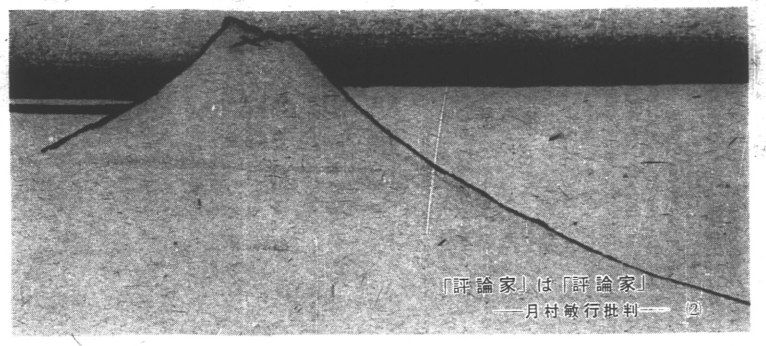
全実行委員は昨年の九大祭を次のように総括している。

「九大祭は、学内の一部の学生が大学の自治、民主主義、平和の問題を提起し

原初的認識の問題

――自己告発は存在証明の永続運動

▷野田茂徳



月村敏行の「こたえる」（本紙2月25日付）は問ひとつ、「『淫猥』あるいは『情況と知識人』」（本紙67年11月25日付）に「こたえる」ものではなかった。何もそこからは月村なる月村の「存在」といったものが浮かびあがってこない。態度なる、そして単なる居直り「ドラマ」であり、かろうじて現象化された言葉のうちにモンタージュされた月村の「知識人」としての存在様態は、へきろうはねずみを売り、きょうはねこを売る商人に譬えられるのである。

たとえば、「『読書新聞』という週刊紙にわたしが執筆を拒否して月村が書くという行為を「そんなへだたった考えをしているわけではない」にも拘らず「ただ行為としてはまるで正反対になるのでいささか感慨に誘われぬでもない」と月村は言い、まるで正反対の行為は、月村にとっては「読書新聞にむかっときめる他の緊張関係を愛して、そこで仕事をしているにすぎない」のだろうと。

「緊張感を愛する」ということは、月村にとって「書評紙」に○印をつけるか×印をつけるかという――沼田氏件に関連を現象を追い情況論、暴力論を求めず――日刊紙書評欄の三日本の問題とも変わりはないのだ。

月村は「緊張感を愛する」ということを、むしろ「病を愛する」と言いかえればいいのであって居直るにしてもその方が強いはずである。

「緊張感を愛する」そして「書く」という行為そこ月村のみなら、黒田寛氏もそう言うであろう。象化された緊張のうちにモンタージュされた月村の「知識人」としての存在様態は、へきろうはねずみを売り、きょうはねこを売る商人に譬えられるのである。

月村が「読書新聞」に書くというのは、まさしくわたしの存在様態である。野田はそれがダメだと批判するならば、それはわたしの仕事をダメだと批判しうる論理までのびていなければならない。内村剛介についてもそうである。内村の存在様態がダメならば、その著作なる「呪縛の構造」や「生き急ぐ」などのダメさがどのように浮かんでいるかを指摘しえなくては、野田は価値ある愛うしき市民として、とどまるほかないのだ。

月村のこのような居直りが、月村にとっては唯一の救いなのか。内村については、ロシアの情況のデモンストレーションをたとえ

月村が「わたしが『読書新聞』に書くというのは、まさしくわたしの存在様態である。野田はそれがダメだと批判するならば、それはわたしの仕事をダメだと批判しうる論理までのびていなければならない。内村剛介についてもそうである。内村の存在様態がダメならば、その著作なる「呪縛の構造」や「生き急ぐ」などのダメさがどのように浮かんでいるかを指摘しえなくては、野田は価値ある愛うしき市民として、とどまるほかないのだ。

月村のこのような居直りが、月村にとっては唯一の救いなのか。内村については、ロシアの情況のデモンストレーションをたとえ

「共同性」とは「評論家」の淫猥な口と手と眼を有するところの「共同性」なる生まれ来るものなのだ。

「共同性」は思想としておのれの内部に生まれる。

「評論家」月村敏行が参入している「共同性のビジョン」とは淫猥の結晶だ。

それは、「野田は共産に目をとられてしまいまして、そこに対して、「おのれの非存在の存在」というこの宇宙の無にはじまり「おのれの非存在の存在」というこの宇宙への生命の参入でも言える不快感、――おのれの現実存在を通して「共同性」の証明にまでおのれの内部にたゆたえてくる嘔吐感。

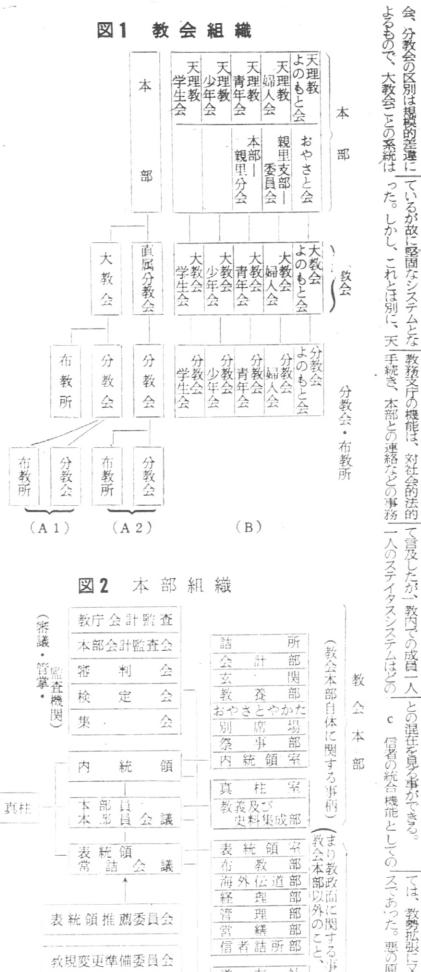
天理教信者の社会的背景

―福岡市における二つの分教会をめぐって―

（上）

文学部・社会学科　竹内小代美

絶えざる社会構造の変化の中で見せ、現在社会への古いタイプの人間が営む諸活動の常として、宗教組織も変化せざるを得ない。一八三四年教祖中山みきが神がかりした天理教は、①第二次世界大戦後の新興宗教ラッシュと並べて、この一般教会は本部に直轄され、分教会は部属教会として大教会に所属し、その部属教会として下級の分教会を部属教会としている（図一―A1参照）。又、分教会の中には直属教会と呼ばれ、本部の直轄を受け、大教会を上級教会として持たないで、大教会的機能を果しているものがある（図一―A2）。そして一般教会は必要に応じて布教所を持つ事ができる。（図一―A1、A2）。大教会、分教会の区別は規模の差違によるもので、大教会との系統は、



絶えず信者を何かの目標に傾倒させて統合

種々のスローガンを掲げて

第一章　天理教の教団組織と概況

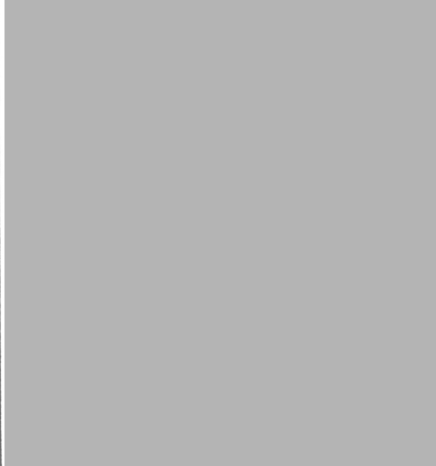
一…教団組織

a　教会組織、本部組織、教区制

天理教では神と人間、集団と集団、集団と人間、人間と人間等あらゆるリレーショナルな結合理念は「親に孝」という意味での親―子関係にあり、その中心組織が、教会本部である。教会本部を頂点に、これに属する一般教会、更に、この一般教会は大教会と分教会に分れ、大教会は本部に直轄され、分教会は部属教会として大教会に所属し、その部属教会として下級の分教会を部属教会としている（図一―A1参照）。又、分教会の中には直属教会と呼ばれ、本部の直轄を受け、大教会を上級教会として持たないで、大教会的機能を果しているものがある（図一―A2）。そして一般教会は必要に応じて布教所を持つ事ができる。（図一―A1、A2）。大教会、分教会の区別は規模の差違によるもので、大教会との系統は、

このような絶対制と民主制の融合、諸機能、諸役割の分化、リーダーの質的変化は、宗教という観念的規範的、制集団が、組織の巨大化に伴って、何らかの方向でビューロクラシー的なシステムを必要とし、それを実際化していった。

一つのタイプとして興味深い。図3に見られる教会制、教区は都道府県単位の中枢機関である教務庁の機能は、対社会的法的事務、一人のステイタスシステムはの



b　信者のステイタスシステム

a において教団組織形態を概観し、組織の巨大化や時代の変遷に伴う組織変化の諸側面について言及したが、教内での成員一人一人のステイタスシステムはの

c　信者の統合機能としての

友、親睦のようなパーソナルな熱心さからも教会長が依頼する場合が多く、ステイタス的機能、呼ばれる、明治以後第二次世界大戦の終結後、大正デモクラシーは薄い。以上三つのステイタス・ロール、役員のステム制、世襲制、宗教人、前項、試的目的に関する事が知られる。現在、教会長は教会長の三分の一が、大教会長は大正五十四年に三三・一、二とも、教団の伸びが再び低下している。この原因としては、一応二十年代で復興がなされ、天理教団が動なら静の時代へ移ったのではないかと推測される。しかしこの期における創価学会の急増である。激しい折伏活動、軍隊的システムの組織、宗教を理論で武装して若年層をもひきつける教義内容は時代の流れに受容されて著しい増加を示した。そして、この外政的とも言える宗教は、他宗教への布教も試み、天理撲滅運動と称して、天理教信者へも激しい折伏活動がなされた。内省的な面を強調し、対他的摩擦を避ける天理教は、ここでは大正十年代と違って、教的にはマイナスの現象となったと考えられる。勿論教義的内省性、教団の方針のみが創価学会の侵食を許した訳ではない（教義も教団も信者も含めて丸ごと宗教集団そのものが、どれだけ社会に受け入れられるかが主たる問題と思われるが）が、昭和三十年代の天理教団の停滞現象は、いずれにせよ、創価学会の急激な進展とは、

第二章　日本全体から見た天理教勢

一において、天理教団の組織様態について概観したが、この節では、日本全国におけるこのような組織様態を天理教がどのように浸透しているかについて若干触れてみたい。

表1は昭和十一年・第二次大戦以後の天理教勢の伸長について、教会数、よびその教会数についての歴史的推移を表化したものである。表2は教会数についての歴史的推移を表化したものである。表の混乱というアノミー的状況は戦前の記録が得られなかったので、歴史的推移の正確さは掴めない。この節では、一応、戦前の教会数の表から歴史的推移を見ることまず大正五十四年に三三・一、2とも、教団の伸びが再び低下している。この原因としては、一応二十年代で復興がなされ、天理教団が動なら静の時代へ移ったのではないかと推測される。しかしこの期における創価学会の急増は、この期における創価学会の急増である。激しい折伏活動、軍隊的システムの組織、宗教を理論で武装して若年層をもひきつける教義内容は時代の流れに受容されて著しい増加を示した。そして、この外政的とも言える宗教は、他宗教への布教も試み、天理撲滅運動と称して、天理教信者へも激しい折伏活動がなされた。内省的な面を強調し、対他的摩擦を避ける天理教は、ここでは大正十年代と違って、教的にはマイナスの現象となったと考えられる。勿論教義的内省性、教団の方針のみが創価学会の侵食を許した訳ではない（教義も教団も信者も含めて丸ごと宗教集団そのものが、どれだけ社会に受け入れられるかが主たる問題と思われるが）が、昭和三十年代の天理教団の停滞現象は、いずれにせよ、創価学会の急激な進展と

四面へつづく

広告のため非表示

三面より

卒業論文

天理教信者の社会的背景

―福岡市における二つの分教会をめぐって―

表裏をなすとしても過言ではないであろう。この意味（一方が内攻的、他方が外攻的）においても、両教団の比較検討は、社会学的興味ある結果が得られるのではないかと推測される。

次に天理教教勢の構成員についてであるが、女・男（男一人に対する女の割合：教人一・四八人、よばい一・九人、別席選び中（古い型の入信者）二・七人、信者一・三人、平均一・六人）であり、教団の指導的地位にある教人をのぞいて、信仰改宗が進むにつれて、女性の割合が高くなっている。年令別では表3のごとく三〇～五九才の信者が多いが、この年令層に信者が多い教団という事になる。これは教義内容が親子関係を重視を中心とするもので、いわば古い型の人間に受け入れられ易い事が、大きな原因と考えられる。また、前述の若年層を擁して教会数（三〇〇カ所以上のほとんどが同地帯）もそれぞれ数（八、〇〇〇人以上が多い地帯）も多い事が知られる。勿論この全国ベルト地帯の中の農村部での内容については資料不足で、全国的検討は不可能だが、次節において、地図1・2ともに高い数字を示している福岡県の地図化をしたもの（実際の年代、各教会名簿）であるが、私達は

図3　教区制

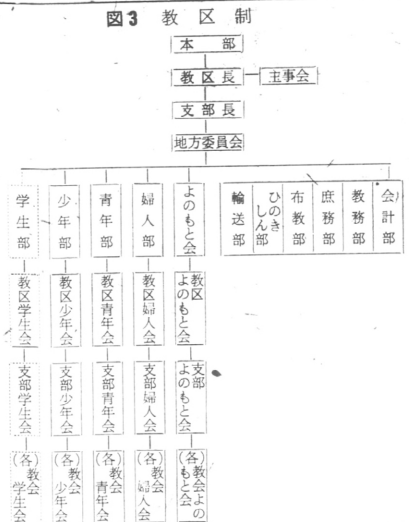
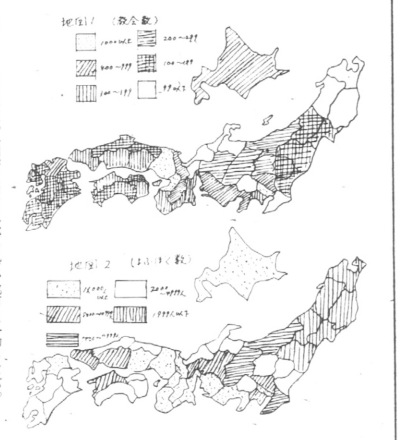


表1

年度末の教会数	教会設立数	よふぼく 教人登録	よふぼく おさづけの理拝戴
昭和11年度	12,154		
21	12,723	307	401	6,031
22	13,066	343	2,122	16,581
23	13,342	276	3,582	22,365
24	13,530	188	2,863	30,749
25	13,636	106	1,835	27,801
26	13,907	271	3,141	31,268
27	14,273	366	4,095	37,033
28	14,418	145	4,592	35,888
29	14,571	153	4,889	32,516
30	14,932	361	5,213	39,492
31	15,073	141	3,887	42,144
32	15,162	89	3,900	29,387
33	15,252	90	3,434	26,684
34	15,299	47	3,140	24,922
35	15,316	17	3,175	23,198
36	15,340	24	2,800	25,574
37	15,368	28	3,775	26,444
38	15,411	41	4,150	27,169
39	15,461	50	4,475	28,372
40	15,686	223	4,875	31,092

つが、天理教計年鑑の市郡、都道府県別教会数を統計すると、市部：郡部＝10587：4898≒2：1となり、昭和四十年度の日本全体の市部人口：郡部人口＝六八・五％対三一・五％を考えあわせると、やや都市の割合が高いが天理教においても、市部への進出はかなり高いと言える。

地図3が福岡市における天理教会の分布を成立年代を少加味して地図化したもの（実際の年代、各教会名簿）であるが、私達は福岡市における教会を見て、都市における天理教教勢の発展分布の仕方を通



第三章　福岡市における天理教の発展と分布

この地図からいくつかの問題点を指摘できる。

①各年代にわたって、地域的には分散的に教会ができており、年代順は、古くから商店街や町工場のあった地区と、明治、大正時代には、農村あるいは漁村であったのが、福岡市の都市化の進展、巨大化の影響を受けて、いわゆる一地つきの住民と農地を住宅地化して入ってきた新入者という新旧両住民を含む郊外地区とに偏在し、新興の団地地区や、旧来からの住宅街にほとんど存在していない。そこで、次章においては、福岡市における教会の地域性の二代表として、東光町にある大博分教会（古くから町工場、商店のあった地区）と、西ノ庄にある草良分教会（郊外地区）を選んで、各成員の諸特性、諸宗教行動についての検討を行い、天理運動の現在的背景を把握したい。

（たけうち・こうみ氏は福岡市箱崎に下宿中）

この卒業論文は今後三回にわたって掲載します。御期待下さい。

表2

年度			年度			年度		
明治28年以前	N	894	大正5～大正14年	N	5,346	昭和21～30年	N	2,334
	%	5.7		%	33.9		%	14.8
明治29～38年	N	1,326	大正15～昭和10年	N	2,593	昭和31～40年	N	799
	%	8.4		%	16.5		%	5.1
明治39～大正4年	N	1,485	昭和11～20年	N	839	昭和40年	N	118
	%	9.4		%	5.3		%	0.75

地図3　福岡市における教会分布

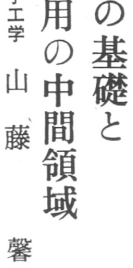
表3　（第四回天理教教勢調査）

	19才迄	20～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70～79才	80才以上	不明	計
N	6,239	75,419	137,927	127,785	122,895	100,246	45,607	9,600	705	626,423
%	1.0	12.0	22.0	20.4	19.6	16.0	7.3	1.5	0.1	100

研究室

超伝導の基礎と応用の中間領域

電子工学　山藤　馨



（人）類がヘリウム気体の液化によって獲得したマイナス二百六十九度という極低温を得ることに成功したのは、今世紀初頭オランダのオンネスという人の手によってであった。彼はさらに純粋な水銀の電気抵抗をそのような極低温で測定した結果、抵抗がある温度以下で全く消失することを発見し、この現象を超伝導と名付けた。その後マイスナーにより、電気抵抗が零になるのは完全反磁性という性質の一側面であることが明らかにされ、超伝導は物質内の電子状態と密接に関連していることが想されるにいたった。しかし、この超伝導現象がどういう理由によって起るのかという微視的説明が得られるまでには、実に半世紀近くも待たねばならなかったのである。

（一）九五七年に米国のバーディーン、クーパー、シュリッファーとの連のポグリーボフによって超伝導の本質を解明する理論が提出された。これを判り易く説明すると次のようになる。金属内では電子は別の自由運動することが出来ないが、そのような自由電子を構成しているのは結晶体の電子である。電子間にはクーロン相互作用による反力が働いているが、一方電子が結晶の格子振動と相互作用することによって生じる間接的引力も存在する。低温になって電子の熱運動が不活発になって来ると、そのような温度で後者が前者に打ち勝ち、そのような場合には、二個の電子ペアーが電子対を作る。このようにして生じた電子対の合成運動量は零であって、電気抵抗を生じない。電子対をこわしてばらばらの電子にするには通常かける電場のエネルギーよりも大きいエネルギーが必要なので、電場をかけて電流を流しても電気抵抗が生じないことになる。

（現）在では非常に多くの金属、合金、半導体などが超伝導になることが判っているが、これらの物質が超伝導状態になると完全反磁性および臨界電流と呼ぶが、初期の頃発見された超伝導物質は比較的小さな臨界磁場しか持たなかったので、前に述べた発想とは大変違ったものであった。しかし、一九五九年に米国のアロトラーがニオビウム線を用いて数千ガウスの磁場を発生させるのに成功したのを機会に超伝導磁石に関する研究は急速に進歩し、現在では十万ガウス程度の強磁場が発生できるようになって実用段階に入って来た。超伝導磁石の主な特徴は、電力をほとんど消費しないで非常に高磁場が得られることおよび従来の磁場発生装置に較べて小型で経済的なことである。

（こ）の他超伝導・常伝導接合を用いて論理素子を作ることも出来る。導膜にすることによって装置の小型化が可能になり、現在超伝導膜を用いた電子計算機でも実験的に試作されている。また超伝導物質間に薄い絶縁層を置いても依然として超伝導になり常電圧で電流が流れることが知られており、これをジョセフソン効果と呼ぶが、このジョセフソン素子などもマイクロ波用能動素子として有望である。

（私）の個人的意見としては、工学部において基礎と応用の中間領域に重点をおくのが研究の一つの行方ではないかと思う。基礎に関する研究は理学部で行なわれ、応用の研究は各種の産業部門に委ねられるべきであろう。超伝導現象の応用に際しての最大の弱点は、超伝導状態になる臨界磁場が非常に低いことである。ちなみに現在得られている最高の臨界磁度は絶対温度にして二十度程度である。この弱点はヘリウム液化機の発達に伴い将来改善され行くことであろうが、むしろ高い臨界温度を示す超伝導物質を作り出すこの方が急務であろう。さらに高い臨界磁場を持つ超伝導物質は大容量の不均質物質であって、これに磁場がかけると物質内で磁束が量子化されて最小の単位を持つことになるが、このような量子化された磁束の集合が物質内でどのような運動するかという問題も重要である。実際超伝導磁石では計算値に比べて低い臨界磁場しか発生きないことが多い。それもこのような磁束の運動によって生じる熱が原因になっていることが多い。

（わ）れわれの研究室では現在入教授、和田、近藤、草柳、宮原の各助手と卒業研究生、それに数人の大学院生等構成されているが、このような補類の研究には人間の努力のほかに最新しかも大型の装置がどうしても必要となる。たとえば数兆分の一気圧の高真空、液膜を蒸着するイオンポンプ蒸着装置を購入したのは我国では最も初期の頃であったし、現在働いている超伝導磁石の最大発生磁界十万ガウスもその一つ我国では最過ある。このような装置を用いて、超伝導現象の応用と基礎の間のギャップを埋める研究を行なわれ積極的に行なっている。（工学部助教授）

三菱重工―大きな会社です　世界中へ手を伸ば

広告のため非表示